

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

【世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性】

開会

○司会 ご来場の皆様、本日は、お集まりいただき、誠にありがとうございます。

ただ今から、世界防災フォーラムプレナリーセッション『より良い復興』の実践的な取り組みと今後の方向性」を始めさせていただきます。

本日、司会を務めます、仙台市在住のアナウンサーで、防災士の黒田典子と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

それでははじめに、基調講演です。

郡和子仙台市長から、仙台発「より良い復興」 - 「Build Back Better」仙台モデルの提示 - というテーマで講演いただきます。

郡市長、よろしくお願いいたします。

基調講演 仙台発「より良い復興」～「Build Back Better」仙台モデルの提示～

(スライド 1枚目表示)

改めまして、皆さん、こんにちは。仙台市長の郡でございます。

今日は世界防災フォーラムへご参加いただきまして、ありがとうございます。

このフォーラムは、仙台市において今年から開催することとした防災関連の国際会議であります。

第3回国連防災世界会議で採択されました「仙台防災枠組」推進に向けた、活発な議論を期待しているところです。

さて、私からは、仙台発「より良い復興」 - 「Build Back Better」仙台モデルの提示 - と題しまして、震災後の復旧・復興期における仙台市の取り組みを踏まえまして、そこから、より良い復興の在り方、また今後の方向性について、ご紹介をさせていただきたいと思っております。

(スライド 2枚目表示)

まず、仙台市の復興の歩みでございますけれども、東日本大震災後、仙台市は、一日も早い復旧・復興を目指して、震災復興計画をもとに、防災集団移転促進事業、多重防御による津波防災、それから復興公営住宅の整備など、都市インフラの整備をはじめ、再生可能エネルギーの活用促進など、防災と環境という両面から、持続可能な社会作りを目指してまいりました。

併せて、地域防災計画の見直し、被災者の生活再建支援、仙台版防災教育の立ち上げなど、いわゆるソフト面の取り組みにも力を入れてきたところでございます。

(スライド 3枚目表示)

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

次に、仙台市の復興の基本的な考え方ですが、4つの特徴がございました。

中でも、完全な防災ではなく、人命を守り、被害を最小限化する「減災」の考え方を採用したこと、行政による公助だけでなく、自分の身は自分で守るという「自助」、それから、地域で支え合う「共助」による復興を目指したことなどは、ほかの地域の復興にも大きな影響を与えたと認識しています。

平成27年3月に仙台で、第3回国連防災世界会議が開催されましたけれども、国際的な防災の取り組み指針として「仙台防災枠組」が採択されまして、その中で、この「より良い復興 Build Back Better」の考え方が示されました。

この「より良い復興」とは、単に災害の前に戻すというだけでなく、被災後の課題や教訓を踏まえて、災害に強い、より良い状態を作るという考え方でして、仙台市が目指した、そして、これまで実践してきた復興の方向性と同じだろうというふうに思っています。

(スライド 4枚目表示)

被災地における復旧・復興事業におきまして、このより良い復興の考え方を取り入れた、さまざまな事業が展開をされておりますけれども、仙台市におきましても、南蒲生にある下水処理場の復旧や、かさ上げ道路、津波避難タワーなどの多重防御による津波防災に取り組んでおります。

一方で、こうしたハード面での復興のほかに、地域でのさまざまな課題や、市民の皆様とともに取り組んできたソフト面での復興事業がございます。

今日は、その仙台市の地域力や市民力を生かした、3つの復興事業をご紹介します、より良い復興につながったその特徴とは何かということを考えてみたいというふうに思います。

(スライド 5枚目表示)

事例の1つ目ですけれども、「避難所運営対策」でございます。

避難所の運営に関しましては、仙台市は、震災の前から、避難所運営マニュアル、これを決めておりました。しかし、災害時における行政と地域との役割分担が明確ではなかったんですね。

災害時に円滑な避難所運営を行うためには、公助にあたる市の職員と、地域の関係者が事前に課題や対応について共通認識を持つということが重要であります。

こうしたことから、震災の後に、指定避難所ごとに担当課を割り当てて、「地域版避難所運営マニュアル」の作成や、避難所運営に関する事前協議を重ねたことによって、それぞれの地域の実情に合わせた運営が可能になりました。

それぞれの地域には、それぞれの個別の事情がございます。

常日頃から、行政と地域が顔の見える関係を築いて、地域の特性に対応した防災・減災対策を実施していくことが、災害時にも高い効果を発揮いたします。

地域性を踏まえた取り組みが、それぞれの避難所運営能力を高めるだけでなく、市全体の

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

防災力を高めることにつながるというふうに確信をしております。

(スライド 6枚目表示)

2つ目は、「被災者の生活再建加速プログラム」でございます。

発災後、プレハブ仮設住宅や、みなし仮設住宅の入居者のお住まいや暮らしの再建というのは、非常に重要な課題でありました。

仮設住宅に入居する被災者の課題というふうに、ひと言で申しましても、これもまた、それぞれの被災者が抱える、おのおのの事情、課題は、さまざまであります。

この事業では、被災された方々の自立に向けた多様なニーズや課題に応えるために、当初から、多くの関係機関、団体との連携を図って、個別の世帯に応じた、きめ細やかな対応を行ってまいりました。

この多様性を踏まえた支援であります仙台市の生活再建支援事業の特徴は、大きく3つございまして、今からご紹介する取り組みが、被災者生活再建加速プログラムの核となっているものであります。

1点目は、仮設住宅に入居する全世帯を戸別訪問いたしまして、生活の実態や、再建への移行や、課題などの把握を行ったということでありまして、

仙台市には、借り上げ民間賃貸住宅が多かったんですけれども、実際に、それぞれの世帯を訪問いたしまして、対面で話を聞いていくことによって、さまざまな課題を抱える世帯の、その存在が見えてまいりまして、具体の支援方法を考える材料になりました。

2つ目の点でありますけれども、戸別訪問で把握した課題等について整理し、世帯ごとの分析を行ったこととございます。

生活再建を実施するには、仮設住宅入居者の共通の課題である、住まいの再建を限られた期間内に実現すること、日常生活をきちんと維持していくことが不可欠なわけですし、

特に日常生活の維持に関しましては、長期的な支援が必要なケースもあるわけです。この2つの性質の異なる課題を切り分けまして、支援の在り方やアプローチについて検討を重ねた結果が、右の方の図になります。

これによって、どのような支援が有効なのか、その適用方法やタイミングといった具体の検討が可能になりました。

3点目は、関係機関、NPOとの情報共有の仕組みづくりでございます。

そして、そこから役割分担の明確化を図ったこととあります。

当初から保健師さんなど、専門職を抱える部署や、社会福祉協議会、パーソナルサポートセンターといった支援団体との共有の場として、ワーキンググループを開催いたしまして、役割分担を行い、常に連携をして、支援を進めてまいりました。

こうした積み重ねによって、仙台の場合では、昨年度末までに、仙台市内で被災をされた方々全て、住まいの再建を果たすという結果につながったものと考えています。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

(スライド 7枚目表示)

次、3点目でございますけれども、「震災復興メモリアル事業」でございます。

仙台平野は度重なる大津波に襲われてきた歴史がございましたけれども、結果として、私たちは、その教訓というものを災害対策に生かすことができなかつたんですね。

そこで、今回の東日本大震災の教訓を、さまざまな手法を用いて、継承していく必要があるというふうに、強く考えたところでございます。

そのために、学識経験者やNPOの皆さんたちも交えた、仙台市震災復興メモリアル等検討委員会、これを作りまして、災害の事実と経験を今後、どのような形で、どのように伝えていったらいいのか検討を行いました。そのうえで、事業を進めてまいりました。

このスライドの左側でございますけれども、荒浜小学校は、震災の脅威や地域の営みを後世に伝えていく重要な場所となっています。

また、市民による経験・教訓の発信も、未来にわたって伝承していくためには、不可欠な要素でございます。

本市では、毎年3月に、「仙台防災未来フォーラム」を開催しておりまして、ここでは市民の皆様方が、防災の取り組みについて、自らの言葉で発表しています。

(スライド 8枚目表示)

仙台らしい復興ということで、3つの事例を説明したわけですがけれども、最後に、こうした取り組みの意味について述べさせていただきたいというふうに思います。

仙台市震災復興計画におきまして、本市の目指す復興の姿を、100万市民一人ひとりの貴重な経験や厳しい状況を支えた知恵を結集し、ともに前へ歩みを進めていくこと、それが、私たちの目指す復興の姿ですと表現しておりました。

先ほどの3つのキーワード、「地域性」、「多様性」、「学び、伝える」、これは復興のソフト面において、特に重要になったポイントでございました。

次に、今後のまちづくりへの関わり方です。

これらのキーワードは、今、仙台市が進めております、杜の都の豊かな環境を基礎に、震災の経験を踏まえて、より防災力の高い都市を目指す「防災環境都市づくり」にも通じる視点だというふうに思っております。

(スライド 9枚目表示)

地域性を踏まえた連携と協力、多様性に着目した、きめ細やかな支援、そして、一人ひとりの経験を生かした伝承、これを進めることが、仙台市ならではの復興の取り組みであると同時に、「防災環境都市・仙台」の基礎でもあります。

大震災と復興を経験した仙台市は、その経験や教訓、推進力となった市民や地域の力を世界に発信していく責務がございます。

私は、市民の皆様方の力を生かし、取り組んできたソフト面のより良い復興の取り組みこ

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

そ、仙台が世界に発信し得るモデルになるものではないかと考えているところです。

(スライド 10 枚目表示)

終わりになりますけれども、次の災害に備えるという、「より良い復興」の取り組みは、いかなる地域においても共通の課題であります。

私たちのささやかな取り組みが、世界の防災文化に、なんらかの貢献ができれば幸いに思います。

仙台で開催された第3回国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組」は、2030年までの世界の防災の指針であります。

今、仙台の防災の取り組みに世界が熱く注目をしてくださっていると思います。

私たちといたしましても、市民の皆様方とともに取り組む、「より良い復興」の仙台モデルを築き上げて、快適で防災力の高い防災環境都市づくりを進めていくこと、そして、この取り組みを世界に発信していくことを続けてまいりたいと、そう強く思っているところでございます。

ご清聴、ありがとうございました。

○司会 郡市長、ありがとうございました。今一度、大きな拍手をお願いいたします。

Build Back Better、より良い復興へ、わかりやすく、我々の愛する仙台の復興モデルをお話いただきました。

それでは、このままパネルディスカッションへと移らせていただきます。

パネルディスカッション

○司会 それでは、お待たせをいたしました。

本日のコーディネーターの皆様をご紹介します。

エフエム仙台防災・減災プロデューサー、板橋恵子様、よろしくお願いいたします。

続きまして、パネリストの皆様をご紹介します。

若林区南材地区町内会連合会会長、菅井茂様。

一般社団法人パーソナルサポートセンター常務理事、立岡学様。

HOPE FOR project 代表、高山智行様。

仙台市まちづくり政策局次長兼政策企画部長、梅内淳様。

よろしくお願いいたします。

それでは、ここからのコーディネーター、板橋様に進行をお願いいたします。

○板橋 ありがとうございました。皆様、よろしくお願いいたします。

第1回の世界防災フォーラム、最初の公開セッションとなります。

タイトルは「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性ということなのですが、

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

もう先ほどのオープニングから、市長の基調講演に至るまで、「Build Back Better」、「より良い復興」という言葉が何度となく出てまいりました。

誰しもが、より良い復興は望むところなんですけれども、この復興に込められたものというのは、非常に多面的なものを抱えております。

まさに、社会全体を支えるインフラの整備・復興であり、街の復興、それからコミュニティーの再生。

また、仕事そして住まいといった暮らしの復興。震災でダメージを受けた体や心の復興。そしてひいては、今後訪れる可能性の非常に高い、さまざまな災害に対して、より強く備える、そういうことも全て包括した復興であろうかと思えます。

そこを含めた、本当の意味の「より良い復興」とはどういうものなのか、私たち市民レベルで、どうすることが、より良い復興につながるのかということ、会場の皆様とご一緒に考えてまいりたいというふうに思っています。

今回は、その、より良い復興に、これまで取り組んでこられた担い手の4人の方々を、パネリストにお迎えしています。

改めて、ご紹介させていただきますと、地域の特性を生かした避難所運営対策に取り組んでいらっしゃる若林区南材地区町内会連合会会長の菅井茂さんです。よろしく申し上げます。

菅井さんは、現在、仙台市内にはですね、1,386の町内会があるということなんです、それを全て束ねます仙台市連合町内会会長会の会長も、今年の6月からお務めです。

そしてお隣は、震災前はホームレスや生活困窮など、さまざまな課題を抱える方々のサポートをなさっていたんですが、そのノウハウを震災直後から被災地支援に活用なさって活動を行っていらっしゃる、一般社団法人パーソナルサポートセンター常務理事の立岡学さんです。よろしく申し上げます。

そして、震災による津波で192人が犠牲となって、町のほとんどが流失した荒浜地区で、さまざまな被災者交流事業を通じて地域の記憶や思いを共有して、地域の再生につなげようというプロジェクト、HOPE FOR project 代表の高山智行さんです。

高山さんは、先ほどの市長のお話にもありましたが、今年の4月30日から震災遺構として一般公開されております、旧荒浜小学校の嘱託職員として、案内役もお務めです。

そしてもう1人は、仙台市からご登壇いただきました。

先ほど、肩書をご紹介いただきましたが、まちづくり政策局次長であり、政策企画部長の梅内淳さんです。

この梅内さんは、震災直後に立ち上がりました仙台市の震災復興室の主幹として、まさに仙台市の復興計画、立案・策定に非常にご苦勞された方でもあります。

そうした観点から、梅内さんには、アドバイザーとしてもご発言していただけたらというふうに思っております。

では、まずは、お三方から、それぞれの取り組みをご紹介いただきたいと思います。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

菅井氏による事例発表

(スライド 1枚目表示)

○菅井 先ほど、ご紹介いただきました南材地区連合町内会の菅井でございます。

私は、先ほどですね、郡市長がお話をなさいました、仙台らしい復興事業の事例の1の避難所運営の見直しという観点でですね、地域の特性を生かした避難所運営対策という形で、私のつたない経験をお伝えできればと思っておりますのでよろしくお願ひしたいと思ひます。

3月11日のですね、あのとき、私たちの南材地区は、当時の連合町内会の荻野会長と南材小学校の関東校長がですね、午後3時半には避難所を開設しました。

そして、夜の8時には避難してきた人々にですね、水とクラッカーを配りました。

人数を確認しますとですね、905人おりました。

今映っている映像はですね、これは翌12日昼の様子でございます。

次、お願ひします。

(スライド 2枚目表示)

これはですね、その避難所運営委員会を立ち上げたことを、12日の朝に荻野会長と関東校長が説明しているところでございます、避難所のルール等もここで私が説明をしました。次、お願ひします。

(スライド 3枚目表示)

小さくて見にくいですが、これが南材小学校の避難所運営委員会の組織図です。

副委員長には南材地区の3名の副会長が就きまして、更に12日からは南材コミュニティ・センター、13日からは八軒中学校避難所をそれぞれ担当しました。

南材地区としては3つの避難所を同時に運営したということになります。

そのほか運営委員にはですね、日赤の南材奉仕団の団長とか、民児協(※民生委員児童委員協議会)の会長さん、あるいは小学校の先生もですね、教頭先生ほか4名の方だけで結構ですという形で、4名の方に手伝ってもらいました。更にボランティアを募って入っていただきました。

それにですね、実は最初のころは公的な公助もありませんでしたが、13日から区役所から4名のお手伝いをいただいて、公助も動き出したわけです。

次、お願ひします。

(スライド 4枚目表示)

これが実際の運営委員会の打ち合わせの様子、12日の朝の様子です。

次、お願ひします。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

(スライド 5枚目表示)

そのほかにもですね、実際の係として、町内会の方々とか、学校近くに住んでいる人たちが手伝いに来てくれました。

これはですね、戦災にやられなかった地域の特性で、南材地区は人情味の厚い、絆の強い表れじゃないかと。これこそが共助だというふうに、私は思っております。

こうやって朝食をみんなでですね、配っている様子です。

次、お願いします。

(スライド 6枚目表示)

南材小学校の避難所と南材コミュニティ・センターは、3月21日に閉鎖しました。

10日間で閉鎖しました。

そして、津波被災者を受け入れた八軒中学校避難所は4月12日に閉鎖しました。

そのあとですね、5月に避難所に避難された方々とか、あるいは運営に携わった方々にアンケート調査をしまして、それに基づいて、この南材地区自主防災行動計画なるものを8月に作りました。

これを連合町内会として採択して、これに基づいて今後の行動を取ろうと、災害に対する行動を取ろうということで作りました。

この中には町内会長の果たす役割とか、あるいは町内会の人々がどこにどの指定避難所に避難するのかというようなことも定めてあります。

次、お願いします。

(スライド 7枚目表示)

また、避難所運営委員会は何をするのか等も明確にして記載していますし、町内会は何をすべきかということも書いてあります。

(スライド 8枚目表示)

次、お願いします。

南材地区で3つの避難所を運営したわけですが、立ち上げも早くですね、避難所の立ち上げも早く、そして速やかに閉鎖ができたということは、これまでの地区の防災訓練が生かされたためというふうに思っております。

特に平成20年からは南材小学校が校舎改築ということもありましたものですから、八軒中学校と話し合いをして、中学校と一緒に防災訓練ができたことで、中学校との関係もよくなりました。

また、21年には避難所運営訓練も取り入れました。

21、22年と避難所運営訓練をやりましたので、そういうこともあって、23年の被災したと

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

きにですね、スムーズに運営ができたのではないかなと思っております。

そして23年の秋には先ほど作った自主防災行動計画に基づいて防災訓練を実施しました。

年々、我々の防災訓練は進化しております。

そして、27年には南材地区だけじゃなくてその訓練参加地区を拡大し、八軒中学校区での防災訓練という形で、若林地区、古城地区も一緒になり、八軒中学校、南材小学校、若林小学校、古城小学校の全児童・生徒、教職員も参加して地域と一緒にやるという防災訓練を行いました。

次、お願いします。

(スライド 9枚目表示)

これが27年の時のですね、初めて行った八軒中学校区の総合防災訓練の南材の小学校の訓練の様子です。

手前は給食テントで、いつでも訓練のときは1,200食のアルファ米のご飯と、それから豚汁を作って皆さんに配っております。

それから校庭に整列している人々は訓練の参加者で、これから各種訓練に入るための準備体操をしているところです。

次、お願いします。

(スライド 10枚目表示)

これはですね、今年度の南材地区総合防災訓練の役割分担表の一部です。

各町内会長さんなどがですね、班長になりながら、地域の係の人を引っ張っていますが、それと同時に、先ほど市長さんのほうからもありましたが、担当課の方々も一緒になってやっていただくということで組み込まれてあります。

あるいは指定動員の方も組み込まれているということで、我々地域がリードし公的な人たちとともに一緒に動くという形になっております。

非常に、いいことだなと私自身は思っております。

次、お願いします。

(スライド 11枚目表示)

今年のこれからの訓練の様子、さっと流しますが、まずこれは中学生のリーダーと地域の人々との打ち合わせの図です。

中学生にしっかりと動いてもらうために、この打ち合わせをしておりますが、今年は、このほかに、このあと更に、全生徒と一緒に打ち合わせもしました。

次、お願いします。

(スライド 12枚目表示)

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

これは、小学校の先生と中学生、住民が一緒になって、テントを組み立てている図です。中学生は普段、テントを立てるといえるということはないので大変ですが、これを機に学んでもらっています。

次、お願いします。

(スライド 13 枚目表示)

これは、今度は町内会ごとに八軒中学校に避難している様子です。

受付で受け付けをし、そしてこれから入るといえることとなります。

並んでいる中に、児童とそれから保護者がいます。

この児童と保護者も町内会と一緒に避難する。

このあと児童は、父兄から分かれて学校へ行って防災授業を受けるという形の訓練になります。

次、お願いします。

(スライド 14 枚目表示)

今年の訓練は10月22日に行ったんですが、朝まで雨が降ったために校庭は使えません。

それで、体育館での訓練となりました。

1,000名近い人が体育館に入って訓練をしたということで、今年また、いろんなことを学びましたので、来年は、また改善していかなくちゃならないなと思っております。

次、お願いします。

(スライド 15 枚目表示)

これが給食テントの内部ですね。

中学生、あるいは日赤の人、消防団、その他近所の人と入って、先ほど言った1200食を作っているということです。

最後になりますが、次、お願いします。

(スライド 16 枚目表示)

南材地区はですね、このように南材地区自主防災連合会のもとで、みんなで毎年訓練をしているわけですが、できるだけ多くの人に参加してもらおう。

それが、いざとなったときにですね、いろんな人の才能を十二分に生かすことができるんだろうと。みんなの力を借りないと、避難所は運営できないなと思っております。

いろんな情報の得意の方には、情報をさせていただくとかですね、体力のある方には力仕事をしていただくとか、そんなのがいっぱいあると思いますので、多くの方に参加してもらっているということが、これからも、そうなのかなと思います。

そしてもう1つはですね、その多くの方で、特に公助の類なる公的な支援の方を我々も受

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

け入れる。そして彼らも一緒になってやってもらう。

そのためには、打ち合わせに必ず出席してもらおうと。

我々の打ち合わせは3回、最低限度やりますので、3回とも来ていただいています。

ただし困っているのはですね、その指定動員の方で若い人たちはどうしても仕事で来られないという場面が多いんですね。

そういう点で、なかなか地元と完全に顔を合わせるということは、できないところがあるなと思ってますので、これをこれからもっともっと仙台市としては緩めていただいて、そのときは仕事を省いていただいて打ち合わせに来られればなという感じがしております。

それからもう1つはですね、我々の訓練には企業の方も参加してもらっていますが、まだ数社です。

この企業の方に、これからも参加していただくようにこの輪を広げていく。

日中であれば、企業の方の手を借りないと避難所運営もできないなど、女の人だけではできませんので、そういう点ではぜひ企業の方の理解もいただいて、これからやっていきたいなと思っているところでございます。

以上、簡単ですがご報告に代えさせていただきます。ありがとうございました。

○板橋 ありがとうございます。すばらしいですね。

やはり、平成21年度から避難所運営の訓練を始めていたので、非常にスムーズに、まさに2時46分の発災から3時半ですから、その間に運営を開始できたということですよ。非常にすばらしいですし、いくつものキーワードがあって、行政ではなく地域がリードする。

あるいは中学生を主体側に引き込むということも含めて、これはぜひほかの地区にも学んでいただきたい取り組みだというふうに思いますし。

実は、私も南材地区の住民で、非常に心強いんですよ。

日ごろからお祭りを開催したりですね、いろいろな取り組みが地区の中で行われていて、まさに地域の絆の深さというのが根底にあるので、災害、困ったときに助け合うということがスムーズにできていくんだろうというふうに思うんですよ。

課題も含めて貴重なご発言、ありがとうございました。

では続いて立岡さん、お願いします。

立岡氏による事例発表

(スライド 1枚目表示)

○立岡 ただいま紹介いただきました、一般社団法人パーソナルサポートセンターの立岡と申します。

先ほどの郡市長の報告の仙台らしい復興事業の事例2、「被災者生活再建プログラム」の部分について、私のほうからお話をさせていただきたいと思います。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

次、お願いします。

(スライド 2枚目表示)

今日ですね、お伝えしたいこと、まず3つあります。

1つ目は私たちの団体について、ちょっと知っていただきたいなということと、どんな取り組みをしたのかということをお伝えしたいと思います。

それと今、見えている課題というものを提示したいなというふうに思っております。

次、お願いします。

(スライド 3枚目表示)

私たちの団体ですけれども、実はさまざまな NPO が集まった団体になっています。

それで、この東日本大震災のために立ち上げたような団体ではなく、震災の8日前の平成23年の3月3日に立ち上げた団体です。

そもそもですね、制度、まさに公的なサービスが受けられない人たちの支援を私たち、やっています、そういった公的な支援を受けられない人たちをなんとかサポートできないかなというようなことですね、ちょうどそのとき国のほうでパーソナルサポートという事業をやっています、制度と制度の狭間に陥った人たちのことを支援していくというようなことを、国のほうで進め始めていたときに、ぜひともそういった制度と制度の狭間に陥った人たちに対する支援をしていきたいなというようなことで立ち上げました。

だけでも3月11日に、あの震災があったわけですね。

そうすると、制度と制度の狭間に陥った人たちをまずサポートするよりも、まず被災者のサポートをすべきではないのかということですね、仙台市と共同で、被災者のまず仮設住宅の見守り。

仮設住宅に入居した人たちのサポートからスタートしなければいけないんじゃないのかということから始めた団体になります。

次、お願いします。

(スライド 4枚目表示)

今どういった事業をやっているのかというと、皆さん、見ていただくとですね、下が時間軸、縦がですね、支援が必要か必要じゃないのかっていうことを表しているんですけども。

その中で、まず被災者、仮設住宅に入った人たちの見守りを始めて、そして次に、見守りは私はいいですって言うけど、ちょっとサポート必要だよなと思う人たちに対しての、ちょっとした仕事の支援をし、その後ですね、被災者の方の就労支援してほしいんだっていうニーズがかなりあったものですから、被災者に対しての就労支援を始めました。

今現在は、この被災者生活再建プログラムを通じてですね、私たちが培ってきた転居支援。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

被災者の仮設住宅から次の住まいへの転居支援というような事業を今、進めているところ
です。

その中で、この図を見ていただいて、色がついているものが実際被災者のための支援事業
です。

色のついていない白い枠のところに書いているのは今、私たちがもう1つ生活困窮者の方
に対する支援というものをやっています。

実は、被災者支援で培ったノウハウを、生活困窮者の方への支援というようなことで、今
展開を始めています。

(スライド 5枚目表示)

次、お願いします。

それで、先ほどの市長の言った生活再建プログラム、加速プログラムの話になるんですけ
ども、じゃあ私たちが、なぜ仙台市さんと協働してこの枠組を進めるようになったのかと
いうと、震災後1年経ったときに、実は厚生労働省の予算をいただきまして調査をしまし
た。

仮設住宅に入っている大体5,000世帯の方に聞いて、2,000世帯から回答をもらった結果を
見て、これは必要だと思ったんですね。

(スライド 6枚目表示)

次、お願いします。

実は、その中で何がわかったか。

被災者の方から聞いて、何がわかったのかといったときにですね、皆さん、あまり答えた
くなかったみたいですけれども、今所得いくらありますか？っていうようなことを聞きま
した。そして、今ハンデを抱えている人が家族にいますか？ってことも聞きました。

そして、次お願いします。

(スライド 7枚目表示)

一番重要なところは、ここだったんですね。

今いくらのところにお住まいですか？ということ聞いたんです。

仙台市は、先ほどの市長の話でもありましたけれども、プレハブ仮設よりも圧倒的に民間
賃貸住宅を借り上げたところにお住まいの方が多かった。

仮設住宅として供与されているうちは家賃がかからない。

けれども、仮設住宅の供与が終わってしまうと、当然、家賃がかかるようになってくる。

その中において、あなたの所得、そして今払ってはいないけれども、いくらの家賃のとこ
ろに入っていますか？っていうようなところを聞いてみたときに、実は、みなし仮設の平
均家賃が6万円を超えていたんです。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

世帯の所得からすると、ちょっと家賃が高いんじゃないかといって、そこでですね、負担なしに住み続けられますか？みたいな話をしたところですね、住み続けられないという人が多かった。

そうすると、仮設住宅の供与期間が終わってしまうと、当然ながら家賃が払えないというような現状が出てくるということは、仮設住宅の供与期間後、間違いなくハウジングの問題というのが絶対的に仙台市の問題になるだろうということで、その辺を実際には仙台市とも共有させていただいてました。

次、お願いします。

(スライド 8枚目表示)

その中でですね、実際に仙台市や関係機関といろいろ話をしたうえで、やっぱり、きちっとしたですね、一人ひとりに合わせた、やはり再建のプログラムを作る必要があると思いますよということをお伝えをし、その中で…。

次、お願いします。

(スライド 9枚目表示)

実際にこのような形で行政の方々、あとは関係機関と一緒にですね、定例の会議を始めたんです。

さっき、市長がですね、話をしていたと思うんですけども、一人ひとりに合わせた形のカルテみたいなものを作って、どうやって再建していけばいいんだろうか。

実際に加速プログラムに関しては、4つのカテゴリーに分けて、まさにしんどい人たちを、どういうふうにしていこうかっていうようなことをですね、みんなで話し合っていたということです。

その中で、一人ひとりに合わせた、全部がうまくいったといえない部分もあるかもしれないけど、出来得る限りですね、一人ひとりに合わせた形の中において、再建を進めていっています。

それが次ですね。

(スライド 10枚目表示)

まさに役割というものを、このような形で実際に分けていただいて、餅は餅屋でですね、あなたのところはこれをやって、私たちはここやるよってというような形で進めさせていただきました。

次、お願いいたします。

(スライド 11枚目表示)

その中で私たちは、一番しんどそうなところ。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

こういう言い方するのいいのかわからないんですけど、生活再建するには、ちょっと時間がかかるよっていう人たちに対するサポートというものをさせていただきました。

当然ながらお話を聞いて実際に不動産屋さんと一緒にいき、そして一緒に内覧にまで立ち会ってですね。

今度、移ったあと、やはり制度的なサービスが必要だという人にはですね、その制度的なサービスまでつなげるっていう本当にきめ細やかなサポートをさせていただいた次第です。次をお願いいたします。

(スライド 12 枚目表示)

その中でですね、私たちが今思っていること、課題だというふうに思っていることは、どうかにかこの被災者の支援をしていたこと…というようなことを平時に展開できないか。ある意味、平時でやっていけば、被災があったときでもそれを転用するような形でできないだろうかというように今考えています。

それとともに、2番目に書いていますけれども、災害ケースマネジメントというものを今創設できないかなっていうふうに思ってます。これは、なんてことないです。

仙台でやった、一人ひとりに対してきめ細やかなサポートをしていくことが、被災者の生活再建であるというふうに私たちは信じてます。

そんな中ですね、やはり一人ひとりをきちんと見ていく。

その中で必要なサポートをしていくっていうようなことをですね、続けていくためにですね、今災害があったときにきちっと人にお金がつく。

そういうような仕組みができないのかなというふうに思ってます。

やはりですね、生活再建、ハード的なものは作ればなんとかなるでしょう。

だけれども、やっぱり心の中ですね、もやもや、このもやもやをどういうふうにサポートしていく中において生活を立て直し、そして次の生活に進んでいくかということが非常に大事なのではないのかなというふうに思っておりました。

実は、見守りの事業からずっとスタートして今、転居支援という中において、早いうちに仙台市は仮設の転居、供与が終わったっていう形になってますけど、実際、私たちは10月の17日を最後に実際に見守りの支援を終えています。

最終的に見守り、15万6,572トントン(※ドアをノックして訪問)させていただいて、9万7,867、面談させていただきました。そして、今があるというような形です。

ご清聴、どうもありがとうございました。

○板橋 ありがとうございます。

後ほど、これは梅内さんにお伺いしたいと思いますが、本当に行政では手が届かない部分を、こうしたご経験をお持ちの団体が関わってくださることで、今、まさにおっしゃったように15万を超える方たちと面談して、ある程度、結果を引き出せるという、そういうこ

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

とが、こういう機関のご協力があるからこそ、できたんですよね、本当に。

○立岡 どちらかという、私たちがあったからというより、やっぱり、この震災に関しては、オール仙台で取り組まなきゃいけない問題なので、私たちが特別だというよりも、実際に餅は餅屋ですね、やれるところでやっていく。

その中における、知恵を出し合った結果じゃないのかなというふうに思ってます。

○板橋 あとは、後ほどまた、平時の支援事業の中で、いかに展開するかということについても伺わせていただきたいと思います。

では続いて高山さん、お願いいたします。

高山氏による事例発表

(スライド 1枚目表示)

○高山 HOPE FOR project の高山と申します。

私はですね、先ほどの仙台市長の基調講演の事例3。

地域ぐるみの震災の経験・教訓の伝承、地域の中の震災の記憶をたどり未来や世界へ伝えることの必要性というところについて、お話させていただければと思います。

まず、私のやっている HOPE FOR project なんですけども、仙台市若林荒浜地区の、その地域の荒浜小学校の卒業生、それから七郷小中学校の卒業生を中心として、震災後、自分たちの世代でもできることをやろうという思いを持って、活動を今でも続けています。

今では地元のひと回り上の世代の方であったり、震災当時、高校生だった子、それからですね、あと東北大の学生さんなんか活動に参加してくれています。

先ほどもちょっとご紹介いただきました、私自身ですね、今年4月30日に一般公開された震災遺構となった荒浜小学校で今職員として勤めさせていただいています。

まず初めに、僕らの活動拠点でもあります荒浜地区についてお話をさせていただきます。

次、お願いします。

(スライド 2枚目表示)

仙台市若林区荒浜地区はここから約12kmほど離れていて、車で約30分程度の距離にあります。

2011年3月11日当時までは、800世帯2,200の方が住んでいましたが、津波によりそのほとんどが流失しています。

震災後の2011年12月16日に災害危険区域に指定されたので、区域内に住まわれていた方々ですね、800世帯の方々は、防災集団移転促進事業として内陸部へ集団移転をしています。

次、お願いいたします。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

(スライド 3枚目表示)

これが震災前の荒浜地区の写真になります。

800世帯、2,200人が住む町は、こうありましたが、それ以上に本当に多くの防災林、松の木がありました。一説には30万本あったといわれています。

また、津波がきた海、深沼海岸と呼ばれていて、仙台市唯一の海水浴場でもありました。年間約4万人の方が夏のシーズンだけでも訪れていた町であり、仙台市民にとってもなじみ深い海辺の町でした。

次、お願いします。

(スライド 4枚目表示)

こちらが震災後の荒浜地区の写真です。

見ていただいてわかるように、そのほとんどが流失しました。

この町で唯一残った小学校に避難した方が全員助かったんですけども、荒浜地区全体では約190名の方が、お亡くなりになっています。

次、お願いします。

(スライド 5枚目表示)

私の活動について、ここからお話させていただければと思います。

まず初めにですね、安否報告、安否確認というものを避難所で行いました。

震災当時、私は家族を含め、荒浜小学校よりも内陸にあります七郷小学校に避難しました。

当時、避難所には3,000人を超える人が避難してしまっていて、喧騒の中で一夜を過ごしました。

ロウソクの火だけがともる学校で椅子に座って眠る人や、すすり泣く声を聞きながら過ごしたことを今でも覚えています。

次の日の3月12日に家族は親戚の家に行ったんですけども、私はそのあとに避難所に戻りまして、やはりその喧噪の中で何もできないまま一夜を過ごしました。

その3月12日の夜に当時、電話も使えなかったんですけども、SNSでツイッターが使えたので、そこにですね、避難所にいる方であれば私が捜しますということを発信しました。

そうしますと、次の日の朝までに100件以上の返事が返ってきていました。

まあ、一個人が安否を報告するというのは、どうなんだろうなと思ったんですけども、避難所にいる方々は、家族や友人、誰が無事かというのはわかったんですけども、遠くにいる親戚、それからご家族にあたる方々や友人、そういった方々は、どうやって無事を知るんだろうと思って、一個人ですけれどもこうやって避難所で発信をしました。

1か月ぐらい安否報告を続けまして、延べ100人以上の安否を報告しています。

ただ1か月後にはですね、だんだん無事を報告できる回数というのが減りまして、見ず知

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

らずの方へ訃報を届けることに戸惑いながら安否報告を続けました。

地域の民生委員の方が遺体安置所に行かれて情報を落としもらって、そういったことを発信していました。

1か月を過ぎた辺りからですね、自分の地元である荒浜地区に行きますと道路に写真が野ざらしになっていました。

数日経っても、またずっと同じ場所にあったので、やっぱりこのままでは風化していってしまうなということで、同級生たちで集まって写真の回収を始めてそれを行政に届けて、のちに写真の返却展示会、写真のスライドの右側ですね、こんな感じで1回目の写真の返却会が行われました。

現在も、こういった写真の修復だったり返却の作業というのは、荒浜の方が代表となっている NPO 法人おもいでかえるさんというのが継続的に活動を行われています。

次、お願いいたします。

(スライド 6枚目表示)

私が活動している、ほとんどメインの活動になるものになるんですけども。

家族や家を失った同級生たちとですね、2012年の3月11日に「亡き人を弔うために花の種を入れた風船を故郷の空に飛ばす」という企画を考えました。

当日、人がどのくらい来るかわからない中で、同級生数人と準備をしていると、1,700人の方々が震災から1年後の3月11日に荒浜を訪れていました。

海に花束を供える方や慰霊祭に参加された方々に声をかけまして、風船をいっせいに空へ放ちました。

そうすると、その青空に飛んでいく風船を見上げて、涙を流す人がいたり、亡き子どもの名前を呼んで「さよならって言わないとね」とかって言う人たちを目の当たりにしたときに、それをなかなか言語化することは難しいんですが、本当にその場に思いがはせた瞬間を見た気がします。

風船1つ1つに「HOPE FOR」という言葉を書いていて、それぞれの願いや祈りを込めて、風船を飛ばしてほしいという思いを込めました。

次、お願いします。

(スライド 7枚目表示)

風船リリースのほかには、いまだ荒浜地区、仙台市ではあるんですけども、夜になると街灯1つありませんので、辺り一面暗闇が覆っています。

なので時折ですね、そういった町をともし企画をしたり、震災遺構となった荒浜小学校なんですけども、その卒業生でもあり、アーティストでもある佐藤那美さんという方がいらっしゃいます。

そういった方と、あと荒浜にゆかりのあるアーティストの方々の音楽ライブを、この小学

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

校で実施しています。毎年数百人の方が企画に参加をしてくれています。

なぜ、こうした活動を続けているのかというのを少しご説明させていただきますと、6年経った今も、地元だった場所に足を運ぶことができない人、流された自宅跡地をまだ見たことない人というのが本当に多くいます。

ちょっと余談になるんですけども、先日ですね、荒浜小学校を見学に近隣の小学校の子が訪れたんですけども、1人の子が帰り際に、3月11日に荒浜小学校にいましたか？って、僕に声をかけてきたんですね。

そのあとに、その彼女が話した言葉がちょっとこう鮮明に残っているんですけども。

「私、家を流されちゃって」と話し始めました。

話を聞いてみると、彼女は、荒浜地区の隣の沿岸部で被災したそうなんですけども、海岸…震災からですね、海の近くに行けなくなって、今年の3月にお母さんに「行ってみようか」と誘われて、僕らの企画に参加したそうです。

「風船を飛ばして、音楽室で最後まで音楽を聴いて帰りました」と話してくれました。

「来年は日曜日なので、また行けますね」と言って去っていったんですけども、そういった子だけではなくて、本当にそういう人たちがいまだに多くいらっしゃいます。

年月が過ぎていくほどですね、当時のことを言葉にすることができなくなっていく。

そういったことが増えていく中で、声に出さなくても思いをはせる場所があること、そして、もう住むことができなくても、集まれる場所や帰る場所が1日だけでもあることが大切だと思い、毎年3月11日にこうした場を作っています。

次をお願いします。

(スライド 8枚目表示)

あとはですね、荒浜で活動されている方を町中に呼んでお話をしてもらおう機会を設けたり…。

次をお願いします。

(スライド 9枚目表示)

荒浜地区、昨年度から集団移転跡地利活用ということで、これから事業者の方々に使っていただくということが決まったんですけども。

今住んでいる、あるいは元住んでいた地元の方々は、そういった事業に対して何を思うのか、というのを声を聞いてですね、行政に届けるようなそういったことをしてきました。

次をお願いします。

(スライド 10枚目表示)

これが荒浜小学校の写真です。

ここで私は今運営、管理、案内をしています。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

次をお願いします。

(スライド 11 枚目表示)

震災当時の荒浜小学校の写真です。

荒浜小学校にはですね、2時46分に地震が起きまして、3時55分に津波が襲いました。それから約10分後の写真なんですけども、避難された方々は、4階、それから屋上に避難して難を逃れました。

次をお願いします。

(スライド 12 枚目表示)

当時、生徒91名いたんですけども、低学年の子どもたち20名は下校していましたので、71名、それから教職員の方が16名、地域の方々が233名、計320名の方が避難しています。

小学校に避難した、そうですね、たどり着いた方は皆さん助かったんですけども、残念ながら消防団の方とかは学校の敷地内で流されてしまったりしています。

この小学校は、校舎の被害状況、それから被災直後の様子を伝える写真や映像から津波の脅威を実感していただく。

あとは、防災・減災の意識を高めるということを目的として、公開されております。

次、お願いします。

(スライド 13 枚目表示)

これは、9月末のデータになるんですけども、ここには4万3,300人と累計来館者数が書いてありますが、昨日時点で約5万人来館者を記録しています。

震災後、このくらいの方々が荒浜地区に訪れるということは初めてのことでありますし、しかるべき場所が開かれれば、関心を持って訪れてくださる方がいるということを実感しています。

次をお願いします。

(スライド 14 枚目表示)

課題についてはですね、パネルディスカッションで話せればと思っておりますので、後ほどお話をさせていただきます。

(スライド 16 枚目表示)

今回の防災フォーラムは、市民参加型のものだと聞いております。

ここにいる皆さんもですね、全員が私のように防災のエキスパートでもないですし、仕事にしているわけでもないと思います。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

ごくごく普通に暮らす一人ひとりがですね、自分事として、今日考えられる場になればと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

○板橋 ありがとうございます。

深沼海岸は、まさに仙台にある唯一の海岸でしたので、恐らく仙台市民は一度ならずとも、夏になると深沼に足を運びましたよね。

あそこの風景が一変しましたし、あの松林がほぼ根こそぎなくなって、住民の方に何うと、実は海がこんなに近いと思わなかったと。

かなり分厚い松林があったので、そんなに近くにあったとはという、なくなって始めて気づきましたとおっしゃる方もいらしたんですけども。

本当に、全く違う風景になってしまいましたですね。

のちほど、また課題もお伺いしたいと思うんですが、3人の方にお話を伺いました。

ここまで、皆さんの発表をお聞きいただいて梅内さん、何かご感想なり、ご質問なりおありですか？

○梅内 それぞれのお立場で、行政のほうで、なかなか手が回りきらない部分について、非常にお力添えをいただきまして、各地域の先進モデルとなるような取り組みをされているお三方のご発表だったと思います。

菅井さんのところは、中学生の方を取り込んでいるというのは、やっぱりすばらしいなど感じまして。

発災のとき、仙台市内も50%断水したんですけども、給水車が行くんですが、重くてお年寄りの方とかは持てないんですね。

そうすると、中学生の子とかもう体力があるので、「おじいちゃん、運んであげるよ」と言っていて、運んでもらったというようなお話をよく聞いておりまして。

まさにもう、中学生、高校生ぐらいになると、発災時には本当に地域にとっては非常に大きな助けができる子どもたちですし。

また、発災の時に小さくて記憶にないような子が、だんだん中学生になってきますので、そういった方をどんどん加えて新しい仲間を増やしていくというんでしょうか。

そういう取り組みが非常にすばらしいと思っております。

新しいという意味では、いろいろ転勤なんかがあって、仙台市で被災をされなかった方も随分増えてきているんじゃないかと思うんですけども、いろいろご苦勞あるかと思うんですが、どのような工夫をされておりますでしょうか。

○菅井 中学生が、即戦力になるということだけではなくてですね、中学生と一緒に避難所運営の経験をすることで、将来どこへ行ってもですね、こういうような災害に遭ったときに、即対応できるというか、ボランティアとしてあるいは地域で貢献できるようにな

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

ってほしいという願いでやっております。

今年の中学生、1～2年生、3年生というのは、あのときの震災のときの小学校1、2、3年生なんですね。

今年我々は3年目でしたが、本当に3年間経つと3年生は本当に力強いというか、頼もしい感じでやってくれます。

これを、これからこう続けていくことで地域の力にもなるし、日本の力にもなるんじゃないかなという感じで我々は今やっております。

○板橋　　ちょっと、その意見に関して質問させていただいていいですか。

南材地区は、本当に素晴らしい取り組みなんですけど、今菅井さん、仙台市全体をご覧になる立場ですけど、仙台市の全体の町内会を見渡したとき、果たしてどうですか？

○菅井　　我々の取り組みを各地で紹介しております。

そういう中で、中学校と一緒に町内会が防災訓練をやっているというのが年々増えてきているということ。

これが例えば、今年ですと同じ日で若林で、我々のところじゃなくて、沖野地区とか、六郷地区でもやるとなると、実際に防災訓練を消防署に頼ってやっているところがあるかと思うんですが、それは期待できない。

震災のときと同じように、自分たちでしなくちゃならないという。

そういうのが、勉強になるんじゃないかなと。

ですから、できるだけ多くの地域で、小学校、中学校と地域が一緒になって訓練したほうがいいんじゃないかなと思っております。

南材それから若林・古城で合わせるとですね、3,000人以上が一緒に動いてやっていますので、仙台市の防災訓練と遜色ないような感じでやっているなと私自身は思っていますので、それを広げていきたいなと思っています。

○板橋　　ありがとうございます。梅内さん。

○梅内　　私どもも、各地域のほうで防災訓練をやっているんですけども、このような地域独自で、しかもその新しい方を取り込みながらですね、主体的にやられている事例というのが、南材地区を模範にしてどんどん広がっているということですので、こういった取り組みに我々のほうもどういった形で、コミットしていけるかというようなことが課題かなと思っております。

立岡さんの事例ですけども、一緒に本当に全戸訪問等、ありがとうございますという感じでやっております。

去年の熊本地震の際、私も去年は3回熊本に行きましたけれども、立岡さんも行かれてい

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

て、立岡さんたちと一緒に作った被災者支援のプログラムが、そのまま熊本のほうで、全くそのままと言っていいほど応用が利いていて、内陸と津波地震という違いはありますがけれども、いろいろな被災の中で応用可能なプログラムかと思いますが、立岡さんも熊本に行かれましてどのように感じられましたでしょうか。

○立岡 私も、熊本に昨年度は10回は超えるくらい行ってるんですね。熊本市さんともお話をさせていただきましたし、益城町さんともお話をさせていただいたりする中において、やっぱり非常に被災者の方、すごく怖いと。明らかに、こちらと違ったのは、やはり、こちらは津波災害のほうが大きかったけれども、実際に緊急地震速報が鳴っているときには、もうドンという形でもう揺れてる。緊急地震速報のほうが、あとだったからと言うんですね。そういう意味では、もう本当にドン、ドンというふうな音が鳴る中、実際に我々、避難所のところの部分とか、あと仮設住宅の部分でお手伝いさせていただく中で、また仙台の教訓を生かす中において、やはり一人ひとりに着目します。供与期間満了するところ、まだ、あまりこう進んでいない部分もたくさんあると思うんですけど、やはり、きちっと生活を見据えた形でのプログラムを進めたいというふうに、お話しいただく中において、仙台の経験が生きていろいろなところで生かされるというのは、非常にありがたいことなのかなというふうに思ってますし。やはり東日本の犠牲者の数が半端ないわけですよ。そのことを考えたときに、何かしらの教訓をきちとした形で仕組み化したうえで、ノウハウというようなものを移転できるということが、本当に必要ではないかなというふうに思いました。

○梅内 発災当初の夏ぐらいからですか。実際に、避難所が7月末に閉鎖をいたしまして、仮設が1万2,000世帯出ておりましたので、そこを回らなきゃいけないというときに、圧倒的に行政のマンパワーが足りませんでしたので、立岡さんたちのチームですとか、さまざまな民間の方々にお手伝いをいただきながら、全戸世帯訪問をしつつ、だんだんそれが類型化できるようになって、だんだん先ほどのプログラムとして出来上がっていったというのを思い出しまして。最初に、やっぱり入っていくときというのは、数も多かったしどうなるかなと思いつつながら我々も入っていったんですが、どうでしたでしょうか。

○立岡 やはり、一番最初は個人情報の問題ですね。仮設住宅にお入りになった方、どんな世帯なのか、わからないわけです。実際に、その個人情報は、お渡しできませんというところから、スタートだったので。ただその後足でかせいでいくようになり。行政とも連携するようになり。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

個人情報も一定程度、いただけるような形になり、そのうえでだんだん見えてきて、次、どうするかというふうに進めていったなというふうに…。

でも本当に、モデルがなかったの。ないんですね。

どうしていったらいいのかというところで、本当に知恵を出し合いながら、けんかもしながらも、前に進めたかなというふうに思っておりました。

○梅内 ありがとうございます。

高山さんの事例は、2面ありまして、1つは、まあ荒浜での被災を経験されているということ、もう1つは、震災遺構・荒浜小学校の運営に関わっていただいて、発信ができていくということ。

先ほど、小学生の方の事例の発表がありましたけれども、やはり半年間で、5万人を超える方が来られていて、東日本の被災地区では一番最初にできた震災遺構でありますので、対外的な方の注目度も高いということ。

1つは、対外的な方に、どういう点を見てもらいたいか。

また、もう1つは、高山さんの母校でもありますし、被災者として今のように整備されて、その住まう場所から荒浜が見られる対象になってしまったところに対する、複雑な葛藤を抱えながら活動されていると思うんですけども、その辺りの思いを聞かせてください。

○高山 先ほどもお話をさせていただいたように、5万人という方々が来たことには、本当に正直驚いています。

実際に、1～2階部分の被害箇所とか見ていただくと津波の脅威というのはわかるので、それを見ていただくだけでもですね、本当に伝わるものがあるんじゃないかと思うんですけども。

その一方で、初めて来る人たちがどこに街があったんですか？というふうに聞くんですね。昨年とかは荒浜で会う方とかにですね、そういうふうに聞かれると、「あなたの足元に暮らしがありました」と言うと本当に驚かれていきます。

なので、1つは、そういう対外的な方に対して、津波の脅威、それから防災・減災というものを改めて考える場所になるということが大事なのかなと思うんですけども。

そこに来たときに、そこに営み、暮らしがあったというふうに捉えていただければなというふうに思います。

2つ目なんですけども、職員としての視点と、被災者としての視点というんですかね。

やはりそういったところでは、来る人たちがですね、地元の方とか来ると、涙を流して帰られる方がいるんですけども。

やっぱりちょっと苦しいなと思うのは、涙を流すだけじゃなくて、「来なければよかった」と言って帰られる方がいらっしゃるんですね。

小学校4階部分が展示スペースになっていまして、もともと音楽室があった場所で、当時、

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

この荒浜小学校で何があったかという映像を流しているんですけども、やはりそういったのは見れないという方も多からっしゃいますし、先ほど私が話したようにまだ荒浜地区に入られていない方がいる。

でも小学校ができたから、行ってみようかなって思う方もいるので。

当時小学校6年生だった子、あそこに避難した子がですね、今年オープンしてからすぐ訪れてくれたんですね。

そのときに、当時のことを話すのではなくて、「やっぱり荒浜は楽しかったです。またみんなが集まりたいです。当時の先生に、よろしく伝えてください」と言ったのを聞いたときに、やっぱりその子にとっては、ここは遺構じゃなくてずっと母校なんだな、というふうになるので。

その2つの、遺構と、そして小学校という側面を持って、その地に在り続けてほしいなというふうに思っています。

○板橋 ありがとうございます。

そういう意味では、本当に2つの面があって。

やはり、あの震災の状況を多くの皆さんに、その記憶として持ち帰っていただくためには、あのような展示は必須だというふうに思うんですね。

じゃないと、全く知識がないままあの場に立ちますと、もともとまっさらな広い敷地が広がっているところという印象しかお持ちにならないと思いますので。

そこに、まさに今高山さんがおっしゃった、かつてはこういう多くの人の営みがここにあったということと、それが一瞬にしてこういう形で奪われたという現実を、やはり映像と、それから校舎自体の被災の状況を目の当たりにしていただくことで、初めてやっぱり実感していただき、それがやっぱり持ち帰った方々の防災意識につながると思うんですね。

そこは非常に大事なポイントだと思います。

一方、やはりお住まいになっていた方々は、そういう捉え方はなかなかまだまだできないというお気持ちもあるので、非常に複雑ですね。

○高山 そうですね。

そういった方がいるから、やはり自分たち、3月11日とか、そんなに年に多くはないんですけども、荒浜で本当に過ごせる、帰ってこれる時間っていうのは大切なんじゃないかなと思ってます。

○板橋 今、災害危険区域に指定された跡地をどういうふうに利活用するかということで動き出しています。

あの場所がどう再生されたらいいかということについては、高山さんはどんなふうにお考えですか。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

○高山　　そうですね。

これは本当に難しい問題だなと思っていて、荒浜地区というのは40ヘクタールあるんですね。

そのほとんどを、これから事業者の方に使っていただくという形になるかと思うんですけども。

来年の春ぐらいには、たぶん事業者の方々が決まって、どんな事業がされるかというのが公表されるかと思うんですけど。

先ほど市長も、ドローンだったりとか、そういう話はしていたんですけど。

ちょっと資料に、この防災集団移転跡地利活用のところで、こう、荒浜地区の白地図にプロットしてあるような図が載っているんですけども。

荒浜地区の皆さんに、声を聞きに歩いたところ、思い出はたくさん話せるんですね。

ただ、「これから荒浜、どうなってほしいですか」と聞くと、答えることができない方が多くいらっしゃる。

それは年代限らずですね、「うん？」と首をかしげる方が多くて。

本当に多くの方の話を聞いて、最後の最後でやっとわかったんですけど、まあ、わかったというか。

そこに住まれてた人は、そこで事業をやることを望んでいたわけではなくて、そこで暮らしが続くことが当たり前だと思っていたので、要は、事業をしていくとか事業者になるということも問われても、それはなかなか答えられないという現状があると思うんですね。ただ、どうしても、今の防災集団移転跡地利活用は事業者にならないと、まずちょっと、関わり合いが持てないんじゃないかなと、そういう印象を僕は受けてはいます。

○板橋　　ありがとうございます。

あまり時間もなくなってきましたので、課題も含めてそれぞれ皆さんがお考えになる、本当のより良い復興とは何かということ、それぞれに伺っていきます。

菅井さんは、まさに今、「仙台モデル」を発信しようとしていますけど、その中の町内会と、一番、その、密接なつながりの部分の仕組みを、今、良い南材のモデルをきっかけに、どんどん仙台市全体に広げていこうとなさっていますが、そこにやっぱり子どもたちも巻き込んだりとか、そういうことがまさに、その復興の1つの大きな要素でもある、次の災害にどう備えられるかという、そういうためのまちづくり、人との絆の関わり合い方、そこは非常にポイントになるかと思うんですけども。今後どのように進めていこうというふうにお考えですか。

先ほど、企業の人たちも巻き込みたいというお話もありましたけれども。

○菅井　　仙台市の施策ですばらしいなと思うのは、震災後、ほとんどの学校に太陽光パ

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

ネルをつけていただいた。

そしてですね、それが、まあ昨日辺りの新聞によれば今度は蓄電できるという、そういうシステムを作っていこうと。

そうすると、平時で電気を学校で作ってそれを蓄電すれば、いつでもその辺で使えるなどという。

ライフラインの中の1つが電気であり水道であり、もう1つはガスかなと私は思っているのですが、そのうちの1つ、電気は、かなりそれで解決されてくるのかなと。

それから2つ目の水なんですけど、先ほど重いものを持って、大変だったという話があったんですが、今ほとんどの学校に水道管から直結する水道栓があるんですね。

今までみたいに、給水車が出なくとも水を確保できるというシステムを作っていた。そういう点では、仙台市は、水と電気はなんとかしてもらえたという…私は感じますので、それこそ、避難所にとってはありがたいことで、きちっと我々は避難所を活用できるなどという感じがしてます。

その運営にあたる者が、その地域住民であるという考えがあります。

そして、昼間であれば、これはまず、お父さん方は皆お勤めで近くにいないんで、女性の方の力を大いに借りなきゃならないだろうなど。

家にいる人、女性とか高齢者とかですね、子どもたちがいるわけで。

そうすると、その人たちとプラスやはり地域にある企業の人たちが一緒になって、その、3日なり1週間なりを乗り切るといえることができるようにすること。

それが、各地域のこれからの務めかなと思ってます。

震災後ですね、各町内会で避難所マニュアルを作りまして、仙台市の市連長会がリードして作って、現在99%の町内でマニュアルが出来上がってます。

ですから、いざとなったときに、どこの町内会でも前みたいなものではなくて、きちっと対応できるという形には、なってるだろうと思ってます。

それを今度は、さっき言った人たちと一緒に訓練をしていけば、乗り切れるんじゃないかなと思ってます。

○板橋 ありがとうございます。

立岡さん、先ほど課題に挙げられた被災支援事業を、いかに平時の支援事業の中で展開するか。

人にお金がつくことが大事という言葉が出ましたけど、その辺をもうちょっとお話しただけですか。

○立岡 私たち、被災者の支援事業を進めていく中で、今生活困窮者の自立支援法の枠組みの支援等もやってるんですけど、サポートする仕組みっていうのが、被災者が生活再建していく仕組みと、困窮者が生活再建していく仕組みって、まあある意味共通するところ

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

ろが非常に多いんですね。

そうすると、今制度上、生活困窮者の支援というものが全国一律で走っている中において、基本的に災害が起きたときに、その生活困窮者の支援をしている人たちのところに予算を拡充する中で、被災者のサポートをするというようなことができれば、平時で常々やっているノウハウを、災害時においてもうまく活用することができないかという意味合いで、人に予算がつけられないかなというふうに思っています。

それとともに、東日本とか熊本みたいに、本当に大規模な災害には補正予算だと言いながらお金がつかますよ。

だけれども局地災害のところって、激甚災害等に指定されないと国からの担保ってないんですね。

でも、そこにいる被災者っていうのは、被害に遭った人というのは、当然ながら同じような心の痛みから、生活の痛みを持っている中において、やっぱり一定程度法律の中において、ハードの整備について、いろいろな予算が…道路が壊れたから復旧させるための予算というのはあるかもしれないけど、そこに被災者のサポートをする、ソフトの部分も一定程度ですね、そこに予算がつくというような形のものがないかなということ。

まずは激甚法という法律の中に、その生活困窮者自立支援とかのそういったソフトの部分に関するものを内容に入れ込んで、そこに予算がつくというような形になると、大きい災害のときに人的サポートも入れられるというようなことを、ぜひとも実現できたらなというようなことはすごく思っております。

○板橋 ああ、梅内さん、例えば、まさに激甚災害等でかなりの予算がつかますが、その予算の使い道でハードとソフトというのは、大体どのくらいの割合なものですか。

○梅内 東日本大震災のときは、また激甚災害法を上回る被害でありましたので、特別立法がなされて、全国民の皆さんに増税をお願いしてという形で25兆円のお金がつきましたが、やっぱりハード予算が多かったと思います。

まして、先ほど立岡さんがご指摘になった、狭い地域の被災には激甚災害法が適用されませんが、基本的には、ハードの復旧の部分にあたる予算がほぼほぼでありますので、壊れたところを元に戻すということが基本になってるかと思います。

この辺りは、国の予算の使い方の問題もありまして、ちょっとコメント難しいところもありますけども。

東日本大震災においては、特別なものがあって、その中で取り組んできた取り組みですが、なお不十分な部分もこちらのほうもあるという反省もあります。

○板橋 そうですね。

できれば、本当にソフトの面の復興がこれだけ大事で大変なことだということ、身を

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

もって我々体感しましたので、その辺の予算の配分的なものも含めて、今後検討していただけるといいかもしれませんね。

さて、高山さんも、課題も含めて、高山さんが考えるより良い復興とは？ということ、伺わせてください。

○高山 はい。

今日、この場所に本当に立つまでに、まあ防災、それからより良い復興ってなんだろうなって、まあ改めて考えたんですけども。次に起こる災害に備えることが防災なのか。

以前のような建物が立ち並ぶことが復興なのか。

結局、今もですね、明確な答えがないままいるんですけども、顔が見える誰かを思って想像力を持って行動を起こすことが、この震災からの日々で僕が学んだ何よりも大切なことだと思っています。

何を言いたいのかと言いますと、ただ単に復興や被災者支援という言葉でくくって、イベントをやるのではなくて、そこに訪れる人の顔が想像できるものであってほしい。

あれから6年も経てば、震災当時に思うことと変わってきているかもしれないから、声なき声に耳をすませてほしい。

震災遺構や跡地利活用も、ただ建物があればいい、ただ事業が行われればいいというのではなくて、これからの人に帰結していくものであってほしいなと思っています。

人が人をつないで、50年後も100年後も、誇れるものであってほしい。

それは行政、民間、関係ないと僕は思っていて、ここにいる皆さんで、仙台市民の方々が考えていくことだと思っています。

ここにですね、オレンジのサコッシュがあります。

このフォーラムで、学生ボランティアの皆さんがこれを身に着けています。

昨日、ボランティアの方々の前でお話をさせていただいたんですけども、皆さん本当に防災に対する学びたい意欲、本当に強く、県内外から集まっていたらいいなと思いました。

彼らが、これからの防災や復興を担っていくんだと僕は思っています。

会場です、もしこのサコッシュをかけている方々を見ましたら、ぜひエールやねぎらいの言葉をかけていただければと思います。

そして、防災の根底にある意味っていうのが、たぶんその、命を守ることならば、復興っていうのは、それからの日々が、今日というこの日が、不足なく過ごせることなんじゃないかなって思っています。

今日、この場所に荒浜に住んでいた方や、この数年間ともに走ってくれた方々もいらっしゃっています。

震災遺構となったその荒浜小学校では、今この瞬間も、その沿岸部で、荒浜を訪れる方々をですね、職員が迎え入れています。

6年半前に何者でもなかった、今も何者でもない僕を信じてですね、背中を押してくれた

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

人たちがいるから、今日僕はこの場所に立つことができます。

だからこそ、ただここで話して終わりではなくて、ここをきっかけに物事がいい方向に進むこと、海辺の町に光が差すことを心から願っています。

そして、私自身も自分の立つ場所で、できることを続けていければと思います。

最後になるんですけども、この数時間の場所を作るために、何か月も前から寝る間も惜しんで尽力してくださった仙台市防災環境都市推進室の皆様、そして渡邊さんに、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

ありがとうございました。

○板橋　ありがとうございます。

最後に梅内さん、今回、第1回の世界防災フォーラムで、こういう形で一般の皆さんにセッションをご覧いただく、これは本当に素晴らしい機会だと思いますし、ある意味仙台市は震災をきっかけに、さまざまなこうした防災を考えて世界に向けて発信するという、ものすごく大きな役割を担うことになったと思うんですね。

そのことも踏まえて、梅内さんがお考えになるより良い復興とは？ということ、最後にお伺いさせていただけますか。

○梅内　そうですね。

今まで、お三方からお話がありましたように、未曾有の震災でありました。

仙台市自身は、1978年の宮城県沖地震を契機として、さまざまな防災対策をしてきた中で、他の政令市と比べても防災の水準が高かったんですが、まあ宮城県沖地震の次の発生確率も99%と言われ備えてきたんですけども、それでも、あのような被害が発生してしまったということで、復興計画を作る際もですね、防災・減災という、完全に防ぐことはできないので、どうしていこうということで取り組んでまいりました。

実際の現場の活動でも、ここにいらっしゃるお三方をはじめとして、多くの市民の皆様のお力なしに、ここまで進むこともできなかったと思っています。

その中で、今日ご発表があった事例なども、他の被災地ですとか、熊本など、あるいは他の国などでも応用が可能な、多くの事例が積み重ねられているとっておりますので、そういうことをこちらからも発信し、活用していただき、またよその地域で起こったことを我々も謙虚に学ぶというようなことを繰り返しながら、やはり全体で防災の取り組みというのを進めていかなければいけないし、そのために仙台市としても、できる限りの発信をしていきたいと思っています。

○板橋　ありがとうございます。

郡市長のお言葉の中にも「仙台モデル」という言葉が、何度も出てまいりましたが、私は、まだ本当の意味の、防災における仙台モデルは確立しきってないというふうに思って、ま

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM1 「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性」

だ発展途上だと思っているんですね。

それを本当に、市民の皆さんのお力も借りながら、本当の意味で世界に発信し、災害によって多くの命が失われることがないように、この「仙台モデル」というのを今後より皆さんでブラッシュアップしながら、今後世界に向けて発信できればいいのではないかなというふうに思っています。

今日は貴重な4人の皆さんのお話を聞かせていただきました。

会場の皆さん、いかがでしたでしょうか。

ぜひ、やはり、本当に市民一人ひとりが、日々の暮らしが当たり前じゃないんだと、あの震災のときにお感じになったはずです。

その日々の暮らしを守るために、私たちは何ができるかということ、ぜひ今日この会場をお出になってからもお考えいただければ幸いです。

ということで、本日のセッションを締めくくらせていただきます。

本日は、ありがとうございました。

閉会

○司会 パネリストの皆様、コーディネーターの板橋様、ありがとうございました。

思いのこもったご発言、そしてコーディネートをありがとうございました。

今一度、盛大な拍手をお送りください。本当に、ありがとうございました。

以上を持ちまして世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2017、プレナリーセッション『「より良い復興」の実践的な取り組みと今後の方向性』を終了させていただきます。

皆様、本日はお忙しい中お越しいただき、誠にありがとうございました。

●以上●